

小松崎 有美
〔埼玉県〕

ジャンケン

兄弟が多いせいか、何事もジャンケンで決めることが多い。残り一個の唐揚げや風呂に入る順番まで。凄く負けた記憶もないがそれなりに悔しい思いをした。八人兄弟の末っ子とあって負けるとよく母の背中で泣いた。

そんな母が昨年二度目の脳梗塞から余命宣告を受けた。院内はコロナウィルスの感染拡大により面会禁止。母の最期に立ち会えないんじゃないかという不安が過った。

案の定、病院から危篤の連絡を受けた時、私と長兄以外は他県在住のため立ち会いができないと言われた。ならば二人でと思った矢先「立ち会えるのは一人だけ」との事。何だか悔しくて切ない。

「兄ちゃん、いいよ」

私が言うとジャンケンで決めようと兄が言う。無言のジャンケン。私のチョキを見るなり、兄がゆっくりパーを出した。いわゆるあと出した。

「お前、行けよ。母ちゃんによろしく」

兄はパーの手で、最後、大粒の涙を拭った。

思えばこれまでも兄はこうして私を助けてくれていた。自分から負けて風呂掃除をし、唐揚げだって私に譲った。自分は水ばかり飲んで。最後は私が母の手を握り、兄が待合室からトランシーバーで「母ちゃん、ありがとう」と叫んだ。涙で震え、かすれた声だった。その声を聞くなり、母は安堵したのか、静かに旅立った。

今でも母の最期を思い出しては涙する。満足にお別れができなかったこともそう。ちゃんと感謝を伝えられなかったこともそう。でもあの時の兄とのやり取りが私に愛顔をくれる。あと出しの優しさには何を出しても勝てない。いつか兄とジャンケンする時は大きく開いたその手で兄を抱きしめようと思う。